

## 思考力・判断力を高める社会科教育の実践 ー主権者教育についてー

埼玉県立伊奈学園中学校 長谷川 亮介

### 1. はじめに

2015年6月に改正公職選挙法が成立し、選挙権年齢が満18歳以上に引き下げられた。昭和20年以来、70年ぶりとなる引き下げである。この改正が提案された会議では、「少子高齢化の時代の中で、若い世代の方々にもしっかりと意見を聴いていかなければいけないし、それだけの責任も持っていただかなければならない」という改定の趣旨が述べられている。しかしながら、選挙が行われるたびに投票率の低さが課題として指摘されており、特に若い世代の低さは顕著である。そのため、単に選挙権年齢の引き下げを行っただけでは、若者の声を政治に反映させるどころか、主権者としての責任を持たせることすら不可能だと言える。

そこで、学校には、若者の意識を政治に向けるために主権者教育の充実が求められている。特に文部科学省は、「主権者教育の推進に関する検討チーム」を発足させ、総務省と共同で主権者教育を推進している。しかし、その内容は、架空の政党や候補者を用いて「投票の仕方」を学ぶことで終わってしまう模擬投票や、「若者が投票に行けば政治が変わる」といった思想的な授業であり、これらが若者の政治参加に結びついているかは疑わしい。また、投票率の推移を基準として測れば、主権者教育の効果が発揮されていないことが示されている。これらのことから、今一度、主権者教育の在り方や、育成すべき資質・能力について捉えなおし、創意工夫を図っていくことが求められていると言える。そこで、本研修では、主権者としての責任に気付き、その責任を果たすために必要な資質・能力を身に付けた主権者を育成するための社会科の授業を構想し、実践を通してその成果と課題を明らかにしていく。

### 2. 研究の目的と方法

本研究の目的は、以下の二点である。

一点目は、主権者に求められる責任に気付き、そ

の責任を果たしていこうとする主権者を育成するための社会科の授業を構想することである。

二点目は、構想した授業の実践を通して、その成果と課題を明らかにすることである。

この目的を達成する方法として、以下の手順を講じる。

第一に、主権者教育の定義と必要性を明確に示す。

第二に、主権者の責任とは何かを明確にする。

第三に、その責任を果たすために必要な資質・能力は何かを具体的に分析する。

第四に、分析した資質・能力を身に付けさせるために、効果的な授業を構想する。

第五に、現行の主権者教育の授業と、構想した授業の差異を明確に示す。

最後に、構想した授業を実践し、成果と課題を明らかにする。

### 3. 研究内容

#### (1)主権者教育の定義

主権者教育とは、平成23年に総務省に設置された「常時啓発事業のあり方等研究会」の報告書において、「国や社会の問題を自分の問題として捉え、自ら考え、自ら判断し、行動していく主権者を育成していくこと」と定義されている。また藤井剛は、主権者教育を広義と狭義に分け、広義を「国や社会の問題を自分の問題として捉え、自ら考え、自ら判断し、行動していく主権者を育てる教育」とし、狭義を「投票行動への関心・意欲・態度、知識・理解、思考・判断などを高める教育」と定義した。この定義における広義の主権者教育は、総務省の報告書と同じであることが分かり、狭義の主権者教育は選挙に特化した学習であると読み取れる。

さらに、令和2年に行われた日本学術会議の政治学委員会（政治過程分科会）では、主権者教育の理論として、イギリスの「シティズンシップ教育」を引き合

いに出し、「公的事柄に関心をもち、それに積極的に関与すること、そのための政治的リテラシーを鍛えること」と説明している。シティズンシップ教育とは、「社会の構成員としての市民が備えるべき市民性を育成するための教育」であり、実は前述の「常時啓発事業のあり方等研究会」の報告書内においても、主権者教育の定義を説明する際の前段部分で使用されている。これらをふまえると、「主権者教育」は、定義上「シティズンシップ教育」に包括されるものであり、その中でも特に政治とのつながりが深いものだと言える。

## (2)主権者教育の必要性

現代の日本は民主主義国家であり、主権者は市民である。しかし、その政治体制は代議制民主主義である。代議制民主主義では、市民が自分たちの代表者を選挙で選び、その代表者に政策決定を行わせる。そのため、何よりも重要な要素は、主権者である市民と代表者である政治家の関係だと言える。市民は、自分たちの考え方を代弁すると考えられる政治家を代表として選出する。政治家は、代表である間に何をなしたかを、市民の納得が得られるように説明できなければならない。前者の機能を代表性といい、後者の機能を説明責任という。この両者が働いているときに、代議制民主主義は民主的であるということができる。しかし、今日の日本の選挙では、半数近くが投票を棄権しており、代表性が機能しているとは言い難い。また政治家は、自身の再選確率に影響を与える有権者や利益団体の意向を念頭に置いて政策決定を行っていくため、有権者全体への説明責任を果たす動機を持たなくなっていく。この状況を変化させ、より良い社会の実現のための政治を求めるのであれば、主権者は、自身に求められている責任が何かを自覚し、その責任を果たし続けていくしかないのである。しかしながら、現在は、その責任が何かや、責任を果たすために必要な資質・能力を学ばないまま有権者となってしまうことが多い。そこで、主権者教育の実施を通して、少しでもその状況を改善していかなければならない。

## (3)主権者に求められる責任と必要となる資質・能力

代議制民主主義における主権者には、どのような責任が求められるのであろうか。また、その責任を果たすためには、どのような資質・能力（特に思考力・判断力）が必要となるのだろうか。考察し、整理していきたい。

一つ目の責任は、多数ある政策を吟味し、公共の利益となる政策を実行してくれるであろう「代表者を選

択して投票すること」である。しかし実際は、投票の棄権が多く、この責任を果たしているとは言い難い。そして有権者の棄権の理由の多くは、ダウンズの言葉に当てはめることが出来る。すなわち、「投票から得られる利益がコストを上回るならば有権者は投票する。そうでない場合、有権者は棄権する。」のである。本来政治とは、自分の利益を求めるのではなく、社会全体をより良くするために行われるものである。そのため、「“社会をよくするため”という公共的な視点で判断し、選択する」資質・能力の育成が求められている。そして、社会のために投票する責任に気付かせる必要性がある。

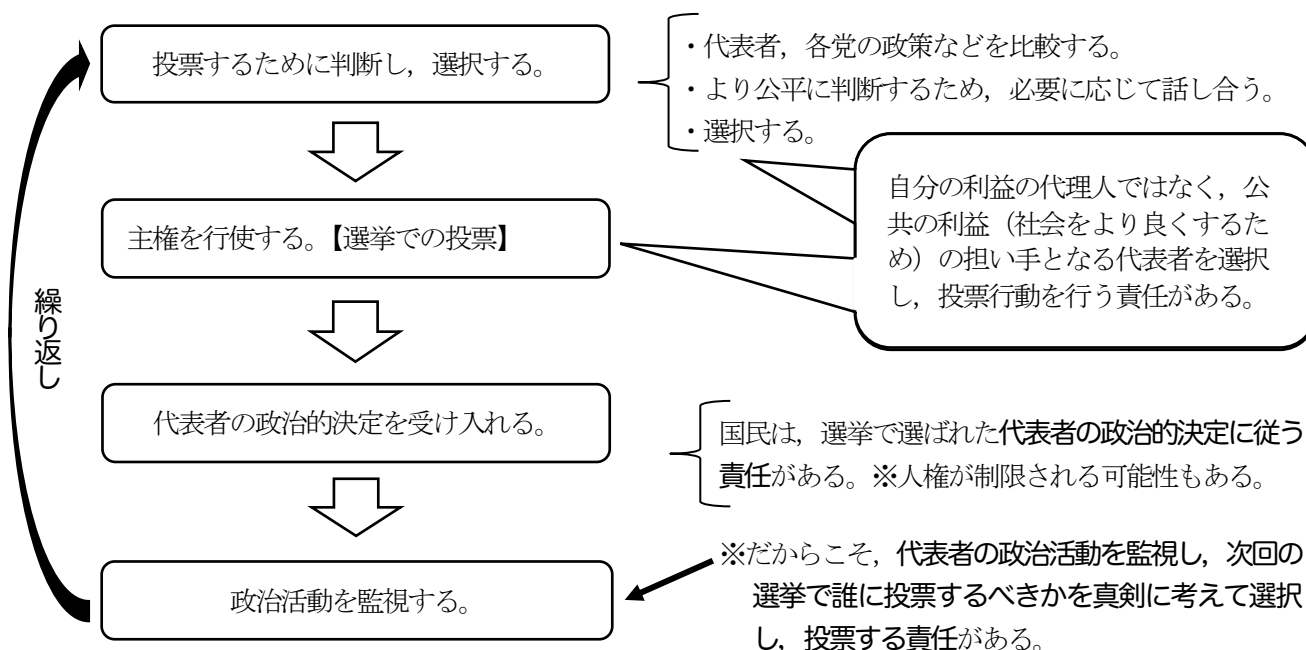
二つ目の責任は、「代表者の政治決定に従うこと」である。ここでは、政治決定が「公共的な視点から合意できる内容かどうかを判断する」という資質・能力が重要となる。近年はSNSなどの普及により、政治決定に対する世論がリアルタイムで可視化されるようになってきている。ただ、ネット上で形成されている世論は、あくまでも一部のネットユーザーの意見でしかないと捉える必要があり、安易に流されるのは危険である。大切なのは、社会全体をより良くするための決定かどうかを見極めることであり、そのための資質・能力は必須と言える。また、仮に合意できない内容であっても、多数決の原理に従って可決されれば、従わなければならない。

三つ目の責任は、「代表者の政治を監視すること」である。ここで重要となる資質・能力は、二つ目の「合意できるか」と共通であり、一つ目の「代表者の選択」に直結するものである。間接民主制が採用されている以上、代表者の政治的決定には従う事が求められ、場合によっては人権が制限される。だからこそ、政治を監視し、真剣に選択して投票することが重要である。

ここまで述べた責任を並べると、【図1】のサイクルが成り立つ。これを生涯にわたって繰り返していくことが主権者に求められる責任である。

## (4)現在の主権者教育の分析

主権者教育は、中学3年生の公民（政治分野）との関連が深く、知識・理解で共通する内容も多い。具体的には、間接民主制などの制度や、政治の役割、選挙の仕方などである。従来のコンテンツ・ベースの教育では、教科書に沿ってそれらの知識を習得させてきた。そんな中、主権者教育の推進を受けて、選挙管理委員会と連携した模擬選挙を行う中学校が増えてきた。これまでの学習と新たな活動を

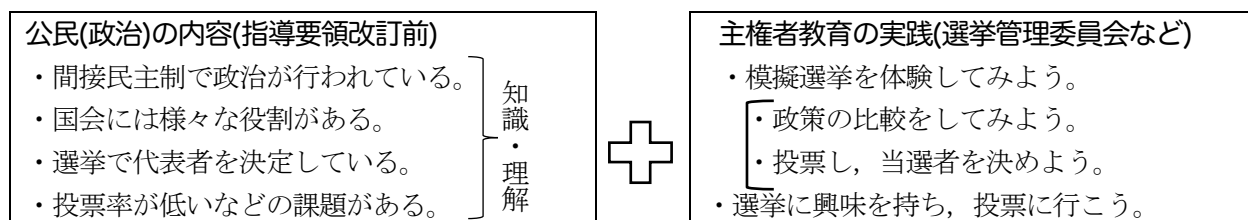


【図1】主権者に求められる責任

結び付けると、【図2】のように示すことができる。

【図2】の主権者教育では、これまでの学習と異なり、「投票の仕方」を具体的に学ぶことができるため、選挙に対する興味を高める効果はある。しかし、架空の設定が多く、政策のリアリティにも欠ける場合がある。また、選択の際に「公共的な視点で

選択する責任」について踏み込んでいないため、投票率の上昇や持続性という点では十分な成果が出ない可能性が高い。この状況を改善するためには、主権者としての責任に気付かせ、主権者に必要な資質・能力を身に付けることが出来る授業へと転換していかなければならない。



【図2】現在行われている主権者教育の例

## (5)検証授業の構想

これまでの研究内容で述べた事をふまえ、検証授業を構想する。前述の主権者教育との差異として、主権者としての責任に気付き、それを果たすために必要な資質・能力を身に付けることを重視する。また、新型コロナウイルス感染症への対応の関係で、通常の授業時数に不足が生じているため、今回の検証授業は、全5時間で構成する。

まず、第1時では、民主政治の必要性や代議制民主主義というシステムが採用されている理由について学ぶ。ここで求められる知識・技能の内容は、従来の授業との差異はない。しかし、理解までのプロセスとし

て独裁者ゲームというアクティビティを取り入れ、そこでの思考を通して内容を理解する授業を構成する。その理由は、学習指導要領の改訂である。今回の改定では、知識の量から「資質・能力」へ、コンテンツ・ベースからコンピテンシー・ベースへと学力観や学習観の変革が強調されている。この変革をふまえると、知識・技能（改訂前の知識・理解）に関する内容について、従来の講義形式で理解するのではなく、思考力・判断力・表現力を使って理解する授業へと変革させていかなければならない。そのために第1時では、ゲームを取り入れ、独裁政治の問題点や民主政治の必要性、そして役割まで迫れるようにする。

次に、第2時では、投票の意義や重要性を学ぶ。ここでは選挙シミュレーションを行い、投票率が低いことや利益団体の影響などで、特定の候補が当選しやすくなる状況について気付かせ、投票の意義や重要性に迫る。また、安易に若者の投票を促すのではなく、年齢別人口比を見せることで、投票で若者向けの政策が増えることは期待できないという現実気付かせ、その打開策を考えさせる。その際に、家族という繋がりを意識させ、他者を巻き込んだ投票行動の重要性に触れる。

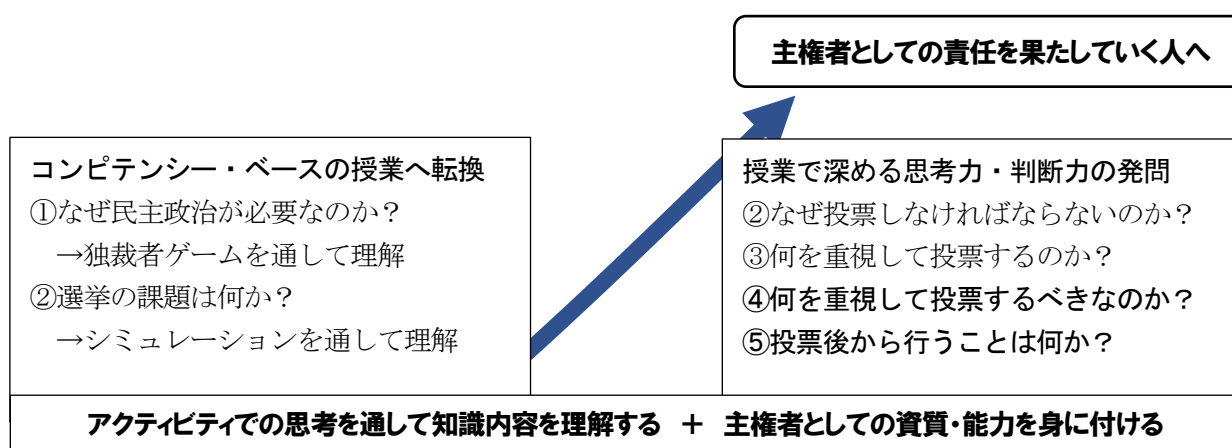
次に、第3時では、ボートマッチを通して自身の政策判断をさせ、選挙結果との比較を行う。このボートマッチは、多くの場合、選挙結果との乖離が見られる。そのため、実際の有権者の投票行動を分析し、現在の有権者は何の政策を重視して投票しているのかを確認する。その上で、自分自身が重視する政策を判断し、選択する。従来の主権者教育は、この思考・判断をも

とに模擬選挙で投票させ、結果を共有して終わっている場合が多い。しかし、今回提案する検証授業では、次の第4時での思考・判断に重きを置いている。

第4時では、第3時で行った自身の思考・判断・選択について再検討させる。その目的は、第3時の思考・判断・選択が、結局のところは、自分の利益を考えた思考・判断・選択になっていることに気付かせるためである。ここでの再検討を通して、「公共的な視点で判断し選択する」という、主権者に求められる資質・能力について気付かせる。

そして、第5時では、これまでの思考を通して、投票が終わった後も、選出された代表者の政治を監視し、次の選挙に向けて思考・判断し続けていく責任について気付かせ、まとめに至る。

以下の【図3】は、授業での手立てとなる発問やアクティビティについてまとめたものである。表中の①～⑤の数字は、第何時かを示している。



【図3】 検証授業での発問やアクティビティ

#### 4. 検証授業の概要

これまでに行った授業構想に基づいて、白岡市立篠津中学校第3学年4組を対象に検証授業を実施した。以下に(1)目標、(2)評価規準、(3)単元計画を示す。

##### (1)単元の目標

- ・民主政治の仕組みや政党の役割、議会制民主主義の意義や選挙の重要性について、主権者としての責任をふまえながら理解する。

- ・民主政治の推進と、選挙などの主権者としての政治参加の関連について多面的・多角的に考察し、より良い社会の実現のために、公共的な視点で政策の優先順位を判断・選択する力を身に付ける。
- ・民主政治と政治参加について、現代社会に見られる課題の解決を視野に、主権者の一人として、主体的に責任を果たしていこうとする態度を養う。

##### (2)評価規準

社会的事象についての知識（及び技能）	社会的事象についての思考力・判断力（・表現力）	主体的に学びに取り組む態度
・政治が法律の制定や財の再配分	・民主政治の推進と、選挙などの	・民主政治と政治参加について、

<p>などの役割を担っていることを理解できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・国民が権力の行使の主体となるために、国民主権が採用されていることを理解できる。</li> <li>・主権者は、選挙での投票や政治の監視などの責任を担うことを理解できる。</li> </ul>	<p>政治参加の関連について多面的・多角的に考察し、より良い社会の実現のために、公共的な視点で政策の優先順位を判断・選択することができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の選挙や低投票率を原因とする諸問題に気付き、その改善のために、他の世代を巻き込んだ行動の必要性を述べることができる。</li> </ul>	<p>現代社会に見られる課題の解決を視野に、主権者の一人として、主体的に責任を果たしていこうとしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・数年後は有権者になるという自覚を深め、社会の発展に寄与しようとする態度を養う。</li> </ul>
---	---	---

### (3)単元計画

時	学習活動・学習内容
1	<p>①学級内での話し合いや友人との約束なども政治だということを理解する。</p> <p>②独裁者ゲームを行い、悪政がしかれている世界を体験する。</p> <p>③「より良い社会」を実現するために民主政治が行われていることに気付く。</p> <p>④政治の役割を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・財の配分（生活保護などの社会保障）</li> <li>・法律の制定や外交など（人権を守る）</li> </ul>
2	<p>①なぜ代議制民主主義が採用されているのかを確認する。</p> <p>②選挙の投票率が低い理由を予想する。</p> <p>③選挙シミュレーション（候補者X氏VS候補者Y氏）を行い、投票率が低いと特定の候補者（候補者X）が当選しやすいことに気付く。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢者の投票率が高いため、高齢者寄りのX氏が当選するケースを体験</li> <li>・利益団体の組織票が存在してX氏が当選するケースを体験</li> </ul> <p>④特定の利益の代表者が当選してしまう選挙の状況を変える手段を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・若者が選挙に行く→人口比で考える。39歳までの100%が投票しても、40歳以上の40%と同数のため、若者は勝てない。</li> </ul> <p>⑤世代を超えてお互いのことを考えて投票することが重要であることに気付く。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「家族」に関する設定を加え、政治について話し合わせる。有権者が子の世代、孫の世代を考えて投票に臨むと、Y氏が当選する可能性が高まる。</li> </ul>
3	<p>①ボートマッチを行い、現在の選挙結果との差異について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の与党のままでいいと思っている人が多い。</li> </ul> <p>②現在の有権者が何を重視して投票を行っているか調べ、選挙結果を捉える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・世論調査から、有権者の多くが経済政策、年金などを重視していることに気付く。子育て世代の母親の調査では教育関係が上位になる。</li> </ul> <p>③自分自身が、何を重視して投票するかを考える。</p>
4	<p>①何を重視して投票するか、クラスの統計結果を確認する。</p> <p>(1) 経済政策 (2) 教育 (3) 年金 (4) 原子力 (5) 消費税 (6) 同性婚 (7) 憲法改正</p> <p>②クラスの統計結果と、実際の選挙結果の関係を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・経済政策や年金が重視され、現状を望む場合は与党が勝ちやすい。</li> </ul> <p>③「本当にそれでいいのか」、考察する。</p> <p>④個人の力で解決できない問題に公的な力が求められることに気付く。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・政治を考えるとときには、真っ先に自分の利益ではなく、自分以外の事、そして社会全体の利益を</li> </ul>

	<p>考えなければならない。</p> <p>・原子力発電の問題や、憲法改正（安全保障），性的少数者，社会的弱者に目を向けなければ，1校時で考えた「より良い社会」に向かえない。</p> <p>⑤主権者として何を重視して投票するべきなのか，自分の言葉でまとめる。</p>
5	<p>①投票後に行わなければならないことを考える。</p> <p>・代表者の行う政治を監視し，次回の選挙に向けて思考・判断，選択する。</p> <p>②授業を振り返り，自分の思考・判断の変化を文章でまとめる。</p>

## 5. 検証授業の分析

生徒の変容を評価するために、主権者としての資質・能力（特に思考力・判断力）に関するルーブリックを以下のように作成した。

評価基準	A	民主政治の必要性や、現在の選挙の課題点を具体的に把握し、社会をより良くしていくために主権者に課されている責任を理解した上で、公共的な視点を重視して、その責任を果たそうとしている。
	B	民主政治の必要性や、現在の選挙の課題点を把握し、社会をより良くするために公共的な視点を重視して、その責任を果たそうとしている。
	C	日本の政治や投票率の問題点を把握し、主権者としての責任を果たそうとしている。

以上のルーブリックをもとに、第3学年4組の生徒の意見文を評価し、以下の表にまとめた。

A	7名	最後の意見文で「主権者の責任」に触れた生徒は7名にとどまり，多くの生徒が「選挙の意義」や「自分の役割」に言及していた。「自分の役割」を責任にまで昇華することには課題が残る。
B	23名	
C	0名	

授業ごとに生徒がどのように思考し、主権者としての責任に到達したのかを分析するため、上記でA評価に到達した「生徒A」の思考を中心に追跡していく。その際に、比較として他の生徒の思考についても触れる。

### 【検証授業 第1時】

第1時は、政治の役割が「法律の制定」と「財の配分」であることを理解するために構成している。ここでは、知識を伝達するのではなく、アクティビティ（独裁者ゲーム）を通して思考させ、理解させることとした。生徒Aは、独裁者ゲームで貧民の役割を担当した。そしてゲーム終了後、以下のような感想を記入した。

・王の指示は不平等なものばかりだった。私はお金がなく、子どもを奪われた。悲しかったが、自分が殺されないようにするので精一杯だった。

次に、ゲームでの体験を踏まえ、「どのような社会が望ましいか」の問いかけに対して生徒Aは以下の三つを挙げた。

・誰もが安心して、平等に暮らせる社会。  
・自分の意見が政治に反映される社会。  
・経済面で困っている人に手を差し伸べられる社会。

生徒Aが挙げた内容は、教師側の狙い通りの解答であった。また、他の多くの生徒が同様の内容を記入している。

次の展開では、望ましい社会を実現するためにどのような政治が必要か思考させることにより、民主主義という言葉を引き出し、「民主政治の必要性」についてまとめさせた。生徒Aのまとめは以下のとおりである。

・独裁をなくし、国民の意見を政治に反映させるため。  
・誰もが平等に暮らし、不当な扱いを受けないようにするため。

そして、生徒Aは「政治の役割」についてまとめた。

・国民の意見を尊重し、国を動かしていく役割。  
・すべての国民が平等に暮らせるようにする役割。

教師側は、「政治の役割は何か」という発問により、具体的な内容を示してくれることを期待していた。しかし、生徒Aのまとめは、具体性に乏しく、政治の必要性と役割の差異が感じられない。そして、ほとんどの生徒が同様の記述であった。そこで、発問を訂正し、「政治の具体的な仕事内容は何か」を問いかけることで、生徒Aから以下の記述を得た。

- ・経済面で困っている人のために社会保障で生活保護などを行っている。
- ・人々の暮らしを守るために法律を作っている。

法律の制定については、他にも20名以上の生徒が挙げることが出来た。ただ、社会保障については7名しか挙げることが出来なかった。いずれも既習事項のはずであったが、本時の学習とは結びついていなかった。その理由としては、それぞれの学習単元内で、ただ用語を暗記するに留まり、現実社会での必要性や、実生活への影響などを十分に考えさせていないことが原因ではないかと考える。また、密かに、外交や安全保障に関する記述も期待していたが、独裁者ゲームに盛り込んでいない要素だったこともあり、記入した生徒はいなかった。

### 【検証授業 第2時】

第2時は、現在の選挙の課題や投票の重要性を理解させるために構成している。ここでは選挙シミュレーションを通して思考させ、理解させることとした。

最初に、代議制民主主義が採用されていること、選挙に投票率などの課題があることを押さえた。低投票率の理由について、生徒Aは以下のように考えた。

- ・関心がない。
- ・自分の意見が反映されないから。

そして、低投票率がもたらす問題については、漠然と「あまり良くないのではないか」と述べるに留まった。他の生徒も同様であった。そこで、実際にどのような問題が生じるのか、シミュレーションを行った。

最初に候補者Xと候補者Yが訴える政策を比較させ、自分が有権者であればどちらに当方するかを選択させた。その結果、生徒全員が候補者Yを選択した。その後、各自に役割カードを配布し、シミュレーションを行った。そして、1回目の選挙では候補者Xが当選した。

生徒Aは、1回目のシミュレーションで候補者Xが当選してしまった理由を以下のように分析した。

- ・高齢者は高齢者向けの政策をする人に、親世代は子供に対する政策をする人に投票するなど、自分のやってほしい政策をする人に投票すると思う。そして、今回の選挙では高齢者の投票率が高いため、高齢者向けの政策が多い候補者Xが当選してしまった。

この記述からは、「投票率の高い高齢者」という視点が明確に示されている。ここで、高齢者向けの政策に偏ってしまう状況が生まれることを説明し、シルバーデモクラシーという言葉を紹介した。

2回目の選挙では、また候補者Xが当選した。生徒Aは、結果を以下のように分析した。

- ・投票した若者の多くが、老後の心配をしているから。

生徒A以外のすべての生徒が、なぜ若者が候補者Xに投票しているのか、理解できていなかった。補足の説明を行い、公共事業に着目させることで、以下の記述を得た。

- ・公共事業の拡大によって仕事が増える会社の人が投票している。

ここまでのシミュレーションから、高齢者有利の現状や、一部の利益集団が選挙に影響を与えている現状をつかませた。それらをふまえ、自分たちの思いを選挙に反映させるためにはどうすればよいのかを考えさせた。生徒Aは、以下の三点を挙げた。他の生徒も同様の内容を挙げていた。

- ・若い人が選挙に行く。
- ・若い人が選挙に立候補する。
- ・癒着を防ぐために監視や捜査班を作る。
- ・若い人と、高齢者の両方に向けた政策を作る。

それぞれについて、現実的な難しさを確認していった。まず、世代別人口を見ると、20代、30代の100%が投票しても、40歳以上の40%が投票すれば、人口で同数程度になってしまい、実際の選挙では勝てない計算になることを伝えた。また、選挙への立候補であるが、衆議院の小選挙区であれば、供託金で300万円かかるため、金銭的な負担が大きいことや、地盤のある二世議員や、秘書官、官僚出身の議員が公認を得やすい状況にあることを説明した。癒着については、当時の検事長と新聞記者の賭けマージャンを紹介し、監視する役割を担う側同士の癒着が疑われるなどの残念な状況もあることに触れた。次に、週刊文春の報道がきっかけで政治が動く場面が増えてしまっていることに触れ、監視を担っているのが週刊誌になってい

るが、その状況は本当に大丈夫か、疑問を投げかけた。また、若い人と高齢者の両方に向けた政策を作るに対しては、「誰が」を明確にさせ、議員が当選するにはどうすればいいのかなどを考えさせることによって難しさを感じさせた。

その後、さらに考える時間を与え、以下の意見が出てきた。

・年齢別の人口に応じて一票の価値を変える。

一票の価値を変えるに対しては、一票の格差という現実があることをふまえつつも、一人一票という平等選挙の原則に反することが良いのか考えさせた。

ここまでで、これ以上の意見を出すことはできなかった。そこで、3回目の投票を行うにあたって、「家族」を構成させ、家族での話し合いを行わせた。70代と40代と20代で集まって選挙について話したグループは、70代役の生徒から、孫の世代が苦勞しているのはかわいそうだ、などの意見が出された。また、他のグループからも、お互いの世代の事を考える必要があるなどの意見が出された。そして、最後のシミュレーションでは候補者Yが当選した。以下は、生徒Aのまとめである。

投票は、国民の意見を政治に反映させるために重要なものである。しかし、高齢者が若者よりも人口が多いため、若者の投票率を上げるだけでは、若者の意見が反映されず、高齢者の意見が通りやすくなる。そこで、祖父母などの家族と政治について話し、若者たち向けの政策に賛成してもらえるように巻き込むことで自分たちの意見を反映させられる。

この授業では、「家族」を用いて、「他者のための投票」という視点を盛り込んだ。しかし、多くの生徒が、自分の意見を通すために、家族に自分たち世代の事を考えてもらうことを述べていた。そんな中、数名だけ、自分たちも高齢者の事を考えて投票することの重要性について述べていた。この数名の生徒の視点が4校時の公共的な視点の土台になっていく。

### 【検証授業 第3時】

第3時は、はじめにボートマッチを行い、自分に最も考えが近い政党を出させた。生徒Aと最も考えが近い政党は立憲民主党と国民民主党であった。現在の与党が行っている政策との明確な相違点としては、夫婦別姓、消費税、原子力発電の項目が挙げられる。他の生徒も与党との考え方の差異が明確となり、結果的に

自由民主党と最も意見が一致した生徒は0人であった。

次に、ボートマッチの結果と、実際の選挙結果を比較し、自由民主党が与党となっている理由を考えさせた。生徒Aは、以下のように記入している。

- ・あまり考えずに、なんとなく自民党を選んでいるのではないか。
- ・今の生活に満足している人がそのままを望んでいるのではないか。

他の生徒からは、「自民党とほかの政党の知名度の差が大きいから」や、「大人が政策を読んでない」などの意見もあった。しかしながら、「高齢者の投票」や「投票率の低さ」について触れる意見や、「利益団体とのつながり」などを予想する意見が出なかった。こちらから指摘して気付いたが、これまでの知識や思考と、現在の問いを結び付ける力が乏しいことを再確認した。

その後は、ボートマッチの質問から、自分が重視する政策のランキング付けを行った。生徒Aのランキングは以下のとおりである。

- |       |                                       |
|-------|---------------------------------------|
| ①経済政策 | 自分が就職するときに不景気だとつらいから。                 |
| ②教育   | 学費が高いと自由に選べないから。<br>自分たちの老後に関わることだから。 |
| ③年金   | 10%は高いと思うし、何に使っているのか、よく分からないから。       |
| ④消費税  |                                       |

クラスの集計結果は以下のようになった。

#### 3年4組政策重要度ランキング

- (1)経済政策 (2)教育 (3)年金 (4)原子力  
(5)消費税 (6)同性婚 (7)憲法改正 (8)夫婦別性

このランキングから、自分の利益を優先した選択を行っている生徒が多いことが読み取れる。もちろん、それが一概に悪いというわけではないが、社会全体をより良くするためにという、「公共的の視点」での判断・選択は非常に乏しく、このままでは投票行動の動機にならない可能性もある。そこで、第4時での再検討へつなげる。

### 【検証授業 第4時】

第4時は、はじめに第3時の集計結果を分析した。①経済政策②教育関係③年金となり、現在の有権者の世論とほぼ同じ結果となった。あえて、大人と同じ結果になったことを褒めながら、各党の政策について比較を進めた。まず経済政策だが、各党の明確な違いが



見出しにくかった。一方で、原子力発電や憲法改正、夫婦別性等については、各党の明確な違いが見出しやすかった。その政策で比較すると、多くの生徒が野党の支持となる。しかし、現在の選挙結果になっているのは、経済政策を重視し、他の政策が争点になりにくいのと、現状に満足している有権者が投票しているからであろう。

経済政策を重視していたとしても、第2時で学習した通り、高齢者有利になってしまう。それを打開する策として、他者を巻き込んで、自分たちのための政策を推し進める必要性を確認した。その上で、「本当にこれでいいのだろうか。」と、質問した。最初は多くの生徒が質問の意味を理解できていなかったようだが、周り話し合う中で、原発や性的少数者の事について話し始める生徒が現れた。特に、最初から原発を最優先事項にしていた生徒に発言を促し、「経済や年金は確かに大切だが、それよりも生活環境を守ることが大切なのではないか」「本当に困っている人のことをまずは考えるべきなのではないか」といった意見を引き出した。以下は、生徒Aのまとめである。公共的な視点を重視して投票することについて明確に述べている。

選挙の時は、自分や家族の事だけではなく、社会・国全体を見て、今の社会に必要なものは何か、誰がどんな政策を必要としているのか、少数意見にも目を向けて政策を選択し、投票することが大切だと思った。そうすることで与党の政策にも変化が起こるのではないかな。

### 【検証授業 第5時】

第5時は、政治家の不祥事などを取り上げ、選挙後に主権者が果たさなければならない役割について考察させた。そして、全5時間の授業を振り返って、意見を記入させた。意見文は授業前の政治や選挙に対する自分の考え、授業を通して学んだこと、自分の意見の三段落構成で記入させた。次は、生徒Aの意見文である。

授業前、政治は自分とは少し離れたところであり、選挙に行っても何も変わらない、意味がないと思っていた。公民の授業で、選挙により社会は決まっていくことは分かっていたけど、「でも変わらないでしょ」という気持ちが大きかった。

今回の授業で、さらに現実の政治について理解した。特に高齢者向けの政策や一部の利益団体と政治の癒着など問題点が多いことに気付いた。ただ、

国民側にも、何も考えずに選んだり、主権を放棄するなどの無責任な行為が見られることを知った。それなのに、コロナなどの緊急時になると不満を言い出すという矛盾も浮き彫りになった。

私は、有権者になった時に、そのような無責任な人にはなりたくないと思った。自分の事ばかりを考えずに、困っている人や少数の人のためにも一票を投じたいと思う。主権を放棄したり、なんとなくで選ぶことはやめようと思った。また、そのように考える人が増えれば、日本の政治は変わると思う。

また、以下は別の生徒の意見文である。この意見文もA評価とした。

授業を受ける前は、私は政治や選挙に対する興味はありませんでした。また、父が国家公務員で話を聞く機会がありますが、よい話を聞いたことが無かったので、あまり良いイメージはありませんでした。

授業を通して、人々の意見を政治に反映させるために民主政治が必要だということや、若者の意見を反映させるためには、祖父母などの家族を巻き込んで選挙に行くことが重要であること、自分中心ではなく、これからの社会の事を考えて重視する政策を選ぶことが大切だということを学びました。

コロナなどの緊急時だけでなく、平時から政治に注目する必要があると思います。主権者である私たちが適当に選んでしまう割合が多いために、実際にあまり活動しない人が当選してしまっているのだとも考えました。政治に文句を言うだけではなく、自分の一票に責任を持って真剣に考えて投票しようと思いました。ありがとうございました。

以上のように、授業前は政治に対して決して良くない印象を持っていた生徒たちが、授業を通して主権者の責任について気付き、その責任を果たしていこうとする姿へと変容した。この様子から、本検証授業の主権者教育に一定の効果があることが証明された。ただ、この効果が一時的なものである可能性が残っている。主権者教育は、継続した教育でなければならないであろう。

## 6. 検証授業の成果と課題

### (1)成果

本検証授業の主な成果として、次の二つを挙げることができる。

一つ目は、主権者教育の中核である、育成すべき資

質・能力を明確にすることができたことである。本研究では、それを「公共的な視点を重視して判断し、選択する」とした。これまで、数多くの主権者教育について調べたが、その中核について見出すことが出来なかった。しかし、主権者の責任を整理していくにつれて、自分の為ではなく、他者のため、そして社会全体のために考えて選択し、判断しなければならないことに気付くことが出来た。同時に、生徒の意見文などから、自分の為よりも他者のためという動機付けのほうに、持続的な投票行動につながる可能性を示せたとも考えている。

二つ目は、「公共的な視点を重視する」ことを中核に据えた主権者教育を実践したことで、生徒に主権者としての責任を果たしていこうとする態度を養えたことである。これは授業の最後の意見文からも読み取ることが出来る。まず、授業前の生徒の政治や選挙に対する考えは、決して前向きなものではなかった検証証授業に入る前に、公民の政治分野の学習を終えていたが、政治について肯定的なイメージを持っていた生徒は32名中、2名だけで、投票への意欲も非常に低かった。しかし、今回の授業を通して明らかな変容が見られた。例えば、授業から学んだことについては、25名の生徒が1、2校時のアクティビティに引っ張られることなく、3校時以降の思考・判断を通して学んだことを記入していた。そのうち、「自分ではなく他者の事を考えること」の重要性について記述した生徒は15名、「社会をより良くするための政策」の重要性について記述した生徒が10名だった。4校時の気づきが深まったと言える。

最後の自分の意見から読み取れることは、32名全員が政治に対しての興味・関心を持つことの重要性について理解をしたという事である。また、その中で27名の生徒は、後に投票行動を行う事について明確に述べていた。そして、ただ投票するのではなく、他者のために、社会のためにという視点を重視できる、「主権者としての行動」につながる記述であった。

以上、生徒の意見文の変容を分析することで、本検証授業は、従来の主権者教育では到達できていない「公共的な視点で判断し、選択していく」という資質・能力を身に付けさせ、主権者としての責任を果たしていこうとする態度を養うことが出来たと言える。ただ単に、主権の行使（投票に行くこと）を強調するのではなく、投票するための判断、選択に思考を向けさせることが効果的だとする先行例になったであろう。

## (2)課題

課題として、特に以下の二点が挙げられる。

一つ目は、主権者に求められる責任に本当に気付いているかである。本検証授業では、筆者は一度も「責任」という言葉を用いなかった。その理由として、選挙や監視などの政治参加が、より良い社会にしていくための主権者の責任であることに、生徒自身に気付いたほしかったからである。残念ながら、最後の意見文で「主権者の責任」という言い回しをした生徒は4名にとどまり、他の多くの生徒が「選挙の意義」や「自分の役割」に言及していた。自分には「主権者としての責任」があることまで到達するためには、さらなる創意工夫が必要になると考える。それは今後の研究の課題としたい。

二つ目は、政策を比較し、吟味する時間が不足している点である。本検証授業は新型コロナの影響もあり、全5時間で構成した。そのため、政策の比較については、具体的中身まで吟味することが出来ず、自分の利益か、社会全体のためかといった漠然とした視点で考察を進めてしまった。今後は政策分析や、財政などの授業と関連させ、「公共的な視点」をより具体的に、細かく考えられるようにしていきたい。また、GIGAスクール構想を歓迎し、外部のアクターを巻き込んだ主権者教育について構想していきたい。

## (3)終わりに

研修を終えるにあたり、1年間温かく丁寧にご指導くださいました、桐谷正信教授に厚く御礼申し上げます。桐谷教授にご指導いただかなければ「主権者に求められる責任」や「育成すべき資質・能力」を明確にすることはできませんでした。今後も学習論についてご教授いただければ幸いです。またこのような貴重な機会を与えてくださいました教育委員会の皆様、白岡市立篠津中学校麻生雅彦校長先生をはじめとする教職員の皆様に、心より感謝と御礼を申し上げます。

## 【主要参考文献・参考資料】

- ・ルソー・作田啓一訳（1991）『社会契約論／人間不平等起源論』白水社
- ・宇野重規（2010）『<私>時代のデモクラシー』岩波新書
- ・門脇厚司（2010）『社会力を育てる-新しい「学び」

の構想-』 岩波新書

- ・バーナード・クリック (2011) 『シティズンシップ教育論-政治哲学と市民-』 法政大学出版局
- ・社会認識教育学会編 (2012) 『新社会科教育ハンドブック』 明治図書
- ・飯田健・松林哲也・木村華子 (2015) 『政治行動論-有権者は政治を変えられるのか-』 有斐閣
- ・藤井剛 (2016) 『18 歳選挙権に向けて 主権者教育のすすめ』 清水書院
- ・大友秀明・桐谷正信 (2016) 『社会を創る市民の教育-協働によるシティズンシップ教育の実践-』 東信堂
- ・唐木清志 (2016) 『「公民的資質」とは何か-社会科の過去・現在・未来を探る-』 東洋出版社
- ・新川敏光・大西裕・大矢根聡・田村哲樹 (2017) 『政治学』 有斐閣
- ・たかまつなな (2017) 『政治の絵本[新版]-学校で教えてくれない選挙の話-』 弘文堂
- ・蒔田純 『政治をいかに教えるか-知識と行動をつなぐ主権者教育-』 (2019) 弘前大学出版会
- ・遠藤ちひろ (2019) 『暮らしの中で「使える」政治』 游学社